映画『手に魂を込め、歩いてみれば』プレス資料

カンヌ国際映画祭 2025 ACID 部門正式出品　映画批評家ランキング第 1 位

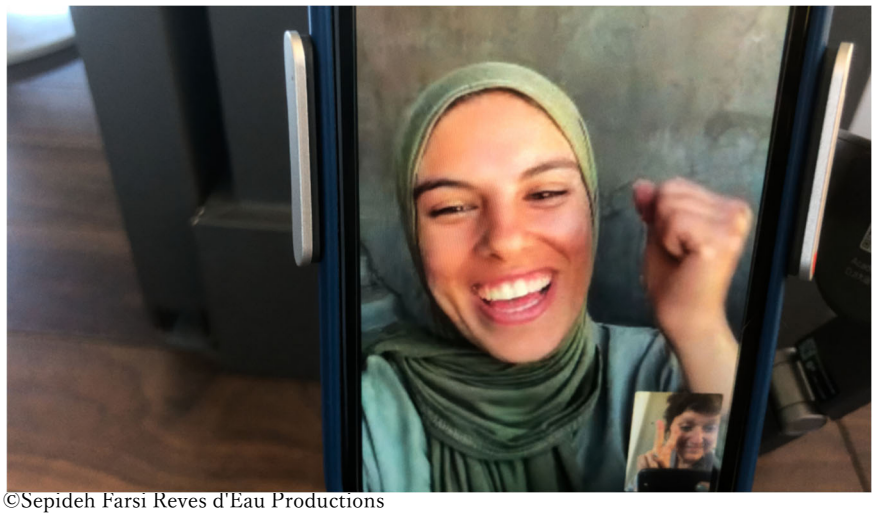
廃墟のガザで撮影を続けるフォトジャーナリストと、彼女を見守るイラン人監督——
1 年にわたるビデオ通話で紡がれた比類なきドキュメンタリー

登場人物：セピデ・ファルシ、ファトマ・ハッスーナ
監督：セピデ・ファルシ　プロデューサー：ジャヴァド・ジャヴァエリー
製作：Reves d'Eau Productions、24images Production　配給：ユナイテッドピープル
2025 年/フランス・パレスチナ・イラン/113 分

2025 年 12 月 5 日（金）ヒューマントラストシネマ渋谷ほか全国順次ロードショー

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

映画概要



©Sepideh Farsi Reves d'Eau Productions

イスラエルによるガザ攻撃が続いていた 2024 年、イラン出身の映画監督セピデ・ファルシは、緊急に現地の人々の声を届ける必要性を感じていた。しかし、ガザは封鎖されており行くことは出来ない。そこで、知り合ったガザ北部に暮らす 24 歳のパレスチナ人フォトジャーナリスト、ファトマ・ハッスーナとのビデオ通話を中心とした映画の制作を決意する。以後、イランからフランスに亡命したため祖国に戻れない監督と、監督の娘と同じ年齢で、ガザから出られないファトマとのビデオ通話が毎日のように続けられた。そして、ファトマは監督にとってガザを知る目となり、監督はファトマが外の世界とつながる架け橋となり、絆を築いていく。

ファトマは空爆、饑餓や不安にさらされながらも力強く生きる市民の姿や、街の僅かな輝きを写真に収め、スマホ越しにガザの様子を伝え続けた。監督が「彼女は太陽のような存在」と形容するように、彼女はいつも明るかったが、度重なる爆撃で家族や友人が殺されていくにつれ、表情を暗くしていく。そして悲劇はファトマをも襲う。2 人が交流を始めて約 1 年後の 2025 年 4 月 15 日、本作のカンヌ映画祭上映決定の知らせを、ファトマは喜んだが、その翌日、イスラエル軍の空爆でファトマを含む家族 7 人が殺されてしまったのだ。25 歳になったばかりのファトマの死は、本人が「もし死ぬのなら、響き渡る死を望む」と書いたように、世界中に波紋を広げることになる。

「ファトマは今夜、私たちと共にいるべきでした。

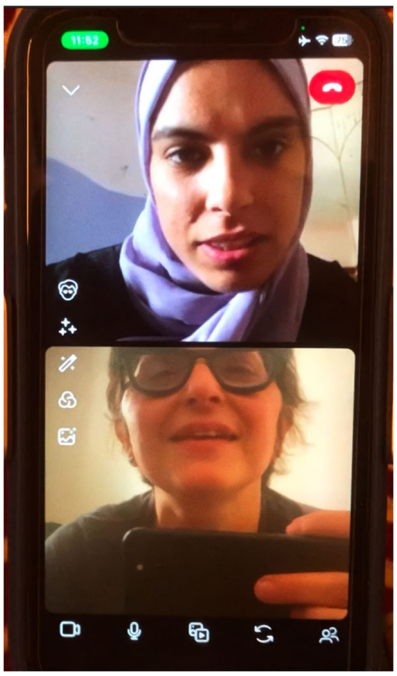
芸術は残り続けます。」

― カンヌ国際映画祭 2025 審査員長 ジュリエット・ビノシュ 開会式でのスピーチ

※ロンドン大学ゴールドスミスカレッジの「フォレンジック・アーキテクチャー」は、ファトマ・ハッスーナの自宅が、GPS と遅延信管を含む誘導・制御システムを搭載した精密誘導弾薬（PGM）を使用して標的とされたことを分析。この攻撃でファトマを含む 7 人の家族が殺害されました。「報道を封殺せよ:イスラエルのパレスチナ人ジャーナリストへの標的攻撃　ケース 1：ファトマ・ハッスーナの暗殺」（2025 年 5 月 14 日発行）　https://staging.forensic-architecture.org/wp-content/uploads/2025/05/2025.05.14-Kill-The-Press-1-Fatima-Hassouna.pdf

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

ファトマ・ハッスーナへの追憶



私たち映画製作者は、毎年開催するカンヌ映画祭のプログラム選定の過程でセピデ・ファルシ監督の映画『手に魂を込め、歩いてみれば』（原題：Put Your Soul on Your Hand and Walk）の主人公ファトマ・ハッスーナと出会いました。彼女の笑顔、証言、ガザを撮影した写真や動画は、爆撃や悲しみ、飢えの中で食料品を配る粘り強さと同じように、まるで奇跡のようでした。彼女の物語は私たちに届き、スクリーンに現れる度に、彼女が生きていることを知り、彼女の身を案じました。

2025 年 4 月 16 日、カンヌ国際映画祭 ACID 部門で映画の選出を発表した翌日、イスラエルのミサイルが彼女の自宅を標的とし、ファトマと彼女の家族数名が死亡したとの報せに、私たちは衝撃を受けました。ガザで標的とされたジャーナリストとフォトジャーナリストのリストにまた 1 つの名前が加わりました。現時点でも、爆撃、飢え、ジェノサイドによって命を落とす被害者のリストが増えており、イスラエル政府が責任を負うべき状況が続いています。

映画製作者として、映画の普及に取り組んでいる私たちにとって、ファトマが指摘したように一人ひとりの顔や体、居た場所など存在を示すものを意図的に抹消する行為の重さを無視することはできません。映像を制作し、上映することは、これらの映像と現実が存在することを主張することです。イスラエル国家がパレスチナの現実を繰り返し抹消しようとする中、私たちはセピデ・ファルシ監督の映画を上映し続けることで、ファトマと彼女の生きた現実が存在し、今も存在し続けていることを主張します。

私たちは、奇跡的な生命力を持つこの若い女性の映画を観て選びました。彼女が私たちと共にいない今、私たちはカンヌを皮切りに、あらゆる映画館にこの映画を届け、支援し、上映します。ファトマ・ハッスーナは抵抗、平和、自由を体現していました。私たちはこれらのことが破壊されることを拒みます。私たち全員、すなわち映画製作者と観客は、彼女の光に値する存在であるべきです。

－ カンヌ国際映画祭 2025 ACID 部門 プログラム委員会

acid CANNES 2025

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

瞳をまとった男

私の死はきっと今
始まるのだ

目の前の男が
全て終わらせようとする前に
ライフルを構えるより早く…

静寂

お前は魚か？

海の問いに私は答えなかった
私の肉の上に降りたカラスたちが
どこから来たのかも知らなかった

もし「そうだ」と言ったところで
私をむさぼるカラスたちを
道理といえただろうか

私は通り抜けた
通り抜けることなく
死が　鋭い狙撃手の弾丸が
私を通り抜けた

そして私はこの街の天使となった
無限に夢よりもなお大きく
この街そのものよりも広く

－ ファテム
　ガザ

ファトマ・ハッスーナ プロフィール

ガザ出身のフォトジャーナリスト。彼女は応用科学大学でマルチメディアを専攻し卒業しました。彼女はタマー・コミュニティ教育財団でフォトグラファーとして働き、文学グループ「ヤラアト・アル・アダビ」の編集チームメンバーとしても活動してきました。さらに、彼女はウーマンズ・アフェアーズ・センター・ガザ（WAC)で写真家として活動し、プラン・インターナショナルの「She Leads」プログラムのメンバーとしても参加していました。彼女の作品は、ガザ内の複数の場所で展示されてきました。

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

監督声明

これはファトマ・ハッスーナ（友人からはファテムと呼ばれる）の言葉です。長編詩『瞳をまとった男』の一節です。硫黄の匂い、死の匂いが漂う詩ですが、同時にファテムのように生命に満ち溢れています。しかし、それは今朝までのこと…。イスラエルの爆弾が彼女の命を奪い、家族の命を奪い、彼らの家を瓦礫に変えたのです。

ファテムはちょうど 25 歳になったばかりでした。私はカイロでパレスチナ人の友人を介して彼女と知り合いました。当時、私はガザへ行く方法を探し求めていました。ガザへの道は次々と封鎖され、シンプルながら複雑な質問の答えを探していました。「あの包囲下で、何年も生き延びるにはどうすればいいのか？」「パレスチナの人々は、戦火で荒廃した祖国でどのような日常を送っているのか？」「イスラエル国家は、数百平方キロメートルの小さな地域に、数多くの爆弾とミサイルを投下し、ガザの住民を飢餓に追い込むことで、何を消そうとしているのか？」

そして、ファテムはガザでの私の目となり、私は彼女にとって、世界への窓となりました。私はビデオ通話でファテムが私と共有してくれた、情熱的で生き生きとした全ての瞬間を撮影し続けました。彼女の笑い声、涙、希望、そして絶望を撮影しました。私は直感に従い撮影していました。これらの映像が私をどこへ導くのか知りませんでした。それが映画の美しさで、人生の美しさです。

2025 年 4 月 16 日にファテムの死のニュースを聞いた時、私は信じられず、何かの間違いだと思いました。数ヶ月前、同じ姓の家族がイスラエルの攻撃で命を落とした時の間違いのように。信じられない思いで彼女に電話をかけ、メッセージを送り続けました。

指一本で押されたボタンが爆弾を投下し、ガザの一軒の家を、そこに生きる輝かしい命ごと消し去りました。もはや疑いの余地はありません。いまガザで起きていることは、2023 年 10 月 7 日にハマスが行った犯罪への報復ではなく、イスラエル国家によって長期にわたり続けられているジェノサイドなのです。

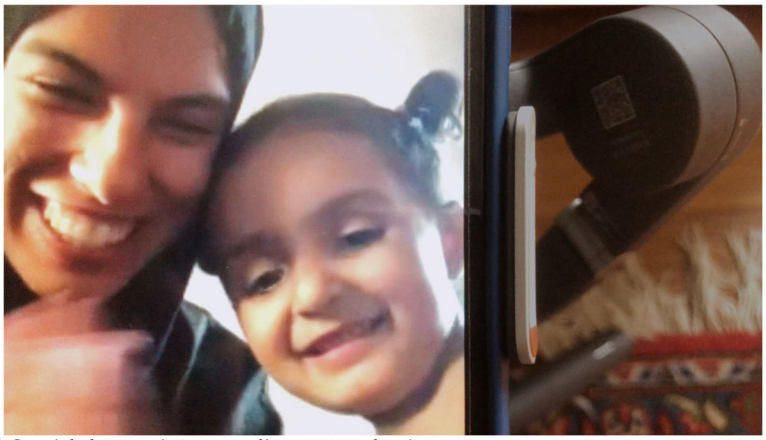
— セピデ・ファルシ

セピデ・ファルシ監督プロフィール
イラン人の映画監督セピデ・ファルシは、13 歳で革命を経験し、16 歳で反体制派として投獄され、18 歳で故郷のイランを離れました。以来パリを拠点に、数学を学び、写真を撮影し、ドキュメンタリー、フィクション、アニメーションを含む 15 本の映画を制作してきました。その中には、『Tehran Without Permission』（ロカルノ映画祭）、『Red Rose』（トロント国際映画祭）、そしてイラン・イラク戦争を扱った長編アニメーション『The Siren』が含まれます。後者はベルリン国際映画祭パノラマ部門の開幕作品となり、数多くの賞を受賞しています。

現在はイラン・ウェスタン映画プロジェクトに取り組む一方、自身の生涯を題材にしたアニメーションプロジェクト『Memoirs of an Undutiful Girl』の開発を進めつつ、イランの民主化運動にも尽力しています。

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

監督インタビュー



©Sepideh Farsi Reves d'Eau Produciton

Q.ファトマ・ハッスーナとの出会いは、あなたのガザに対する見方をどのように変えましたか？
この映画は、ガザを数字や破壊の映像といったメディアのステレオタイプな表現を超えて理解したい、という私自身の思いから生まれました。私は、誰か特定の人の声や日常の生活に根ざした視点を必要としていたのです。カイロで出会ったパレスチナ難民を通じて、オンラインでファテムと出会い、すぐに深い絆が生まれました。彼女は私にとって“ガザの目”となり、写真や動画、メッセージを通して、現地で体験したままの戦争の現実を伝えてくれました。常に尊厳を保ち、被害者としてではない彼女の証言は、私の認識を大きく変えました。ガザはもはや抽象的な概念や廃墟ではなく、彼女そのものとなったのです。生き生きとし、強く、ユーモアに満ち、そして同時に脆さを抱えた存在として。

Q.なぜ あなたはあなたたち 2 人の会話を中心とした映画を作ることに したのですか？
ほぼ毎日続いた私たちのビデオ通話には、他の方法では決して捉えられない生の真実が詰まっていました。停電やネット障害、爆撃の合間を縫ってやり取りを続けました。

時には、ファテムが私に電話をかけるためだけに、通信電波を探して何キロも歩くこともありました。その努力には、自らが証人となり、ガザの現実を消え去らせまいとする強い意思が込められていました。「私はここにいる」と伝えるために。

この映画は、答えを求める私の旅と、戦争に中断されながらも日常の断片を残したいという、私たち二人の願いから生まれたのです。ご覧いただく映像は不完全かもしれませんが、そこには確かな生命力と人間性、そして伝えるべき証言が宿っています。

Q.ファテムの死は、カンヌ映画祭での作品の選出発表直後に起こりました。この悲劇的な出来事をどのように体験されましたか？
前日、私たちは会話をしていました。選考の結果を知った彼女は大喜びし、カンヌに呼ぶ話で盛り上がりました。彼女は「行きたい」と言いましたが、その条件は「必ずガザに戻ること」でした。どんなに苦難に満ちても、ガザは彼女にとって揺るぎない故郷だったのです。

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

翌日、彼女はこの世を去りました。衝撃は計り知れませんでした。けれど私は、この映画を悲しみだけで終わらせたくはありませんでした。私たちが共につくり上げたものは、生きた証です。この映画は、彼女の不在を語るのではなく、彼女という存在の光を伝えるものなのです。

Q. この映画は、彼女という存在を通してガザを描き出しています。制作に取りかかる段階から、政治的な意図を意識されていたのでしょうか？
ガザを撮影する以上、どのような形であれ政治性を帯びないことは不可能だと思います。実際、映画とは常に何らかの形で政治的なものだと私は考えています。けれども、私の最初の意図は明確な主張を掲げることではありませんでした。私が望んだのは、10 月 7 日以降の戦争報道ではあまり伝えられない声を届けることでした。

ファテムは、自分の街や家族、日常を、明快で優雅な言葉で語ってくれました。その言葉は、どんな演説よりも力強く響きました。彼女は人生について語り、ドローンについて冗談を言い、破壊された故郷への愛を語りました。私は彼女の視点に寄り添い、その視点を観客と共有する空間を作りたかったのです。この映画は、しばしば見過ごされてしまう私たちの人間性に、人々が耳を傾け、感じ、気づくために制作しました。

Q.観客にこの映画で何を持ち帰ってほしいですか？
私は観客が、たとえ一つでも声や視線、微笑み、美しい魂を心に刻んでくれることを願っています。戦争の映像の向こうに、人間性を探し出してほしいのです。私はメッセージを押しつけようとしているのではありません。この映画は説明を与えるものではなく、視点を示すものです。

映し出されるのは、私たちがほとんど目にしてこなかった土地、そして忍耐強く生きる人々の姿です。観客が映画を観た後に、心が動き、疑問を抱き、何が起きているのかを知りたい、視点が変わったと感じてくれるなら――それはファテムの声が届いた証です。そして、それこそがこの映画が成し得る最も大切な成果だと思います。

クレジット

監督：セピデ・ファルシ
登場人物：セピデ・ファルシ、ファトマ・ハッスーナ
プロデューサー：ジャヴァド・ジャヴァエリー
ガザ写真：ファトマ・ハッスーナ
編集：セピデ・ファルシ
編集アドバイザー：ファルナス・シャリフィー
音楽：シナ・ペイガミー
ダイアログ エディター：レオ・ボワソン
カラーグレーディング：マリー・ガスコアン、アレクサンドル・ウェストファル
制作：Reves d‘Eau Productions、24images Production
原題：Put Your Soul on Your Hand and Walk
配給：ユナイテッドピープル
©Sepideh Farsi Reves d'Eau Production

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

もし私が死ぬなら、響き渡る死を望む。

私の唯一の親友で、物事をうまく捉えることができ、私が望む通りの写真を撮影できる男。私と兄弟たちは、この戦場で 300 日間死に続けてきた。血が地面に流れ、兄弟の血が私に触れて汚れる瞬間を恐れている。300 日間、私たちは赤と黒の色しか見ず、死の臭いを嗅ぎ、苦いものを食べ、死体しか触れない。

今回初めて、私は大きな喪失を経験した。家族 11 人を失った。私にとって最も大切な人々。しかし、私を止めるものは何もない。毎日、目的もなく街へ出る。世界に見せたいのは、私が見ているものだけだ。この人生の瞬間を記録するために、写真を撮影する。この歴史は、私の子どもたちが聞くかもしれないし、聞かないかもしれない。

私たちはここで毎日、さまざまな形と色で死んでいる。私は、苦しむ子どもを見るたびに、千回死ぬ。私は粉々になり、灰になる。私たちがこうなったことが、この無意味さが、毎日私たちを食い尽くすこの怪物が、私を痛めつける。

毎日家を出る時、母が私を見送る姿を見るが、私は振り返らない。あの目を見たくないから。母にこの悲しみを味合わせたくないから。しかし、この国には死以外に何があるというのか？

死について言えば、もし私が死ぬなら、響き渡る死を望む。ニュースの速報や数字の羅列に名前が載るような死は望まない。世界中に知れ渡るような死、永遠に続く痕跡を残す死、時間や場所によって埋もれない永遠の姿を望む。

2024 年 8 月 3 日　本人の Instagram より https://www.instagram.com/p/C-LQuqmM3Ty/

配給・宣伝：　ユナイテッドピープル株式会社　pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669